ASEV Jpn. Rep.,Vol.5, No.1 (1994)

岡山県におけるブドウ品種の動向

岡山県立農業試験場
藤　井　雄一郎

岡山県は，自然災害が少なく年間の降水量が少ないので果樹栽培に適している．とりわけ，ブドウ，モモは全国的にも知名度は高い．特にマスカット・オブ・アレキサンドリアの栽培は明治時代から行われており，長い経験から得られた高度な栽培技術は，何にも代え難い大きな財産である．この解説では，それぞれの品種の栽培技術の詳しい紹介は省略し，近年における岡山県の栽培品種の推移と，現在主要品種となっているものの紹介，将来どのような品種が本県で望まれるのかについて説明したい．

大正時代から昭和10年台までは，米国系品種のキャンベル・アーリーの栽培面積が急増し，昭和42年までには岡山県のブドウ栽培面積の56％を占める品種となった．そして，この品種は，他品種の導入が進んでも昭和の末期まで面積の第１位を占めていた．また，昭和20年代後半から30年代にかけて，ネオ・マスカット，マスカット・ベーリーＡの栽培が盛んになり，岡山県の代表的品種の一角を占めた．一方，昭和35年頃には，種なし化の技術が実用化されたことから，デラウェアの栽培面積が増加したが，主力品種になるまでには至らなかった．

昭和40年代に入り，ヒロ・ハンブルグ，巨峰，高尾，ピオーネなどの導入が進んだものの，その当時は大規模産地を形成するまでには至らなかった．このうち，４倍体品種で欧米交雑種のピオーネは，岡山県で多くの農家が採り入れている平行整枝，短梢せん定方式で栽培すると，花震いが激しく，結実が不安定なため，果実の品質が良好であるにもかかわらず，その栽培面積は微増していくに過ぎないという状況が続いた．しかし，昭和52年に植物生長調節剤の利用による種なし化と果粒肥大の技術開発が進み，品種転換事業も手伝って急増し，平成に入ってからは，栽培面積が本県で第１位となった．ピオーネよりも優れた果実品質や栽培の容易さを兼ね備えた品種が現れない限り，この品種の栽培面積は，岡山県の中北部地域を中心にさらに拡大していくであろうと思われる．

冒頭に述べたマスカット・オブ・アレキサンドリアは，主にガラス温室で栽培が行われ，外観の美しいマスカット香を持つブドウとして全国的にも有名な品種である．この品種の栽培には高度な技術が要求され，その技術が伝え続かれている岡山県での栽培面積が全国でも90％以上を占めている．長い栽培の歴史を持つこの品種も，主に進物用としての

地位を確保してきたが，不景気で進物の動きが悪くなっているなど，今後とも安泰であるとは言えない状況にある．

岡山県では，マスカット・オブ・アレキサンドリアと同様に温室で栽培され，他県での栽培がほとんどみられない品種にグロー・コールマンがある．収穫時期が非常に遅い品種で，11月から1月にかけてが最盛期である．極めて淡泊で果汁の多いブドウであるので，外観の似た巨峰と似た味を期待してこのブドウを食べた場合には，期待はずれになりかねない．しかし，暖房がよくきいた部屋で，喉の渇きをいやす手段としてのこの品種の知名度はもう少し上がってもよいと思う．

次に，岡山県では今後どの様な特質を持ったブドウが栽培面積を伸ばす可能性があるのかについて述べる．近年，ブドウの食味に関するアンケートの中に種なしの方がよいとする回答が多く見受けられるようになってきた．香りや果肉の舌ざわりなどの果実品質を比較した場合には，同一品種では有核果が優れている場合が多く，種なし化ばかりを推進し過ぎることは厳に慎まなければならないが，消費者の意見もまた無視することができない．このような中で，マスカット・オブ・アレキサンドリアは，植調剤による種なし化が行いにくいことから，種なし化からは一定の距離を保っていたが，最近では，農家から種なしのマスカットはできないものかとの問い合わせが多い．

また，大粒系の品種を求める声も根強い．紫黒色で粒が大きいピオーネが高い地位を占めたことから，赤色や白（緑）色の大粒系の4倍体品種が農家や市場関係者から求められている．赤系のものでは，安芸クイーンという品種が有望視されている．この品種は，農水省果樹試験場の安芸津支場で育成され，着色の美しさ，食味の良さから注目を集めている．白（緑）色系の品種としては，まだ品種登録はされていないが，岡山農試で農水省からの依託業務としての系統適応性試験を行っている中に有望であろうと思われる系統がある．どちらともピオーネや巨峰に準じた栽培法，例えば，短梢せん定で無核果を生産することができ，糖度が高く香りが良いという，付加価値を重視する岡山県で定着しやすい特徴を持ち合わせていることから伸びてゆく可能性がある．

個人的な意見では，品質の良い安いブドウを消費者に味わってもらいたいとなるのであるが，現実には，栽培が容易で，果実の外観が良い，より付加価値の大きいブドウが農家にとっては栽培したいブドウである．農家の現状を考慮すると，やはり儲かるブドウを推すことになるのである．農家の生き残りのための高収入確保といった意味で短期的な視点に立った上での外観重視，そして，それによって高価格で販売されるという現象は完全に否定する訳にもいかず，技術者としてジレンマを感じることもある．しかし，長期的には，安く，味もほどほどに受け入れられる程度の外国産の果実も今以上に食い込んでくるわけであるから，せめて価格はいくぶん高いが，その理由として，極めておいしいが栽培には高度な技術を必要とするような品種が岡山では生き残っていって欲しいと考えている．